

---

# 仮面ライダー 1 3

龍馬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダー13

### 【Nコード】

N2126B

### 【作者名】

龍馬

### 【あらすじ】

巨大会社ME。そこは金を貰い仮面ライダーを派遣する世界の裏に根付く組織。出現するクリーチャーを、金を貰い倒し。そしてライダー達は自らを高め、唯一無二の存在へと変わるため戦う。これは欲、自らの願望、のためだけに戦う処刑人のライダーの話。

## 1、処刑人の仮面（前書き）

金を貰い、怪物を倒すライダー！？

最早正義の味方では無い！！

お気に召さない方は多数いると思います。

そんな方はお手数ですが戻るボタンをクリックしちゃって下さい。

## 1、処刑人の仮面

そこは暗い……

太陽も、月も星も、そこを照らす事は出来ない。

唯一蛍光の光だけが僅かに、そこを照らす。

OLらしき女性がその暗い場所をトボトボと歩いている。仕事帰りだろう。

深夜の裏通りである“そこ”は不気味で、小さな物音でさえも恐怖をあおる。ガタツ　と路地に積み重なられている、ビールを運ぶ力ゴが崩れる。

女性はビクツと体を震わし、後ろを振り向くが、そこには何も無いことを確認し、再び前を向き足早に進み出した。

直後、ギョオオオオオ！

と、不快な鳴き声が響き渡る。慌てて後ろを振り向く女性。女性の背後からは、二足歩行で人型をしているが、昆虫の様な硬い、黒光する体に、両肩と両肘、両膝周辺だけ緑色の鎧が装備されている体をした化け物が迫っていた。

顔は異常な程大きな目と、頭に生えた二本の触角、ダラダラとヨダレを垂らす口をしている。

「きゃあああ！」

女性は当然悲鳴を上げ、逃げだそうとするが、腰が抜けて立つ事さえ不可能だった。奇声をあげ迫る化け物が、大きく口を開きビシヤビシヤと、口から吐き出される液体を女性に吹きかける。

死、食される。私はこの化け物に殺され、食われる。女性の頭によぎるのは、生命を剥奪される事だけ……

「プギイ！」

化け物の鋭く尖った爪が女性に触れる瞬間、真横から何かが化け物を殴り付けた。化け物は勢い良く吹き飛び、地面を滑る。

女性は直ぐ様自分を助けた命の恩人の方へ、顔を向ける。

そこに立っていたのは、タイトなジーパンを履き、自分の体より大きめなパーカーを着ている“人間”だった。だが、助けられた女性には喜ぶ事が出来なかった。

助けてくれた“それ”は確かに人間だが、男か女かも分からないのだ。

何故なら……

女性を助けた“人間”は『13日の金曜日』というスプラッター映画に登場する“ジェイソン”の仮面を被っていたからだ。

女性からすれば、それも恐怖の対象に過ぎない。少しずつ歩く感覚を取り戻して来た足に体重をかけ、女性はゆっくりと立ち上がった。

ジェイソンの仮面をつけたそれは静かにその様子を見守っている。

「キイイイイイ！！」

不意打ちを喰らい怒ったのだろう、先程より大きな雄叫びをあげ化け物がジェイソンの仮面をつけた人間に襲いかかる。

「俺とやるつもりか？いい度胸だ！」

一人称が俺、のため男と思える“それ”が、パーカーの上から腹部に手を当てる。キュウウンと金属音が鳴り響き、光が眩い光が放たれ灰色をしたパーカーが透ける。

パーカーから透けて見える物は、ベルトの様な形をしていた。

化け物が仮面の男に飛びかかる直前、男が小さく呟く。

「変……身」

その瞬間、13の数字が彫られている光のドアがベルトから飛び出した。飛び出た光のドアが、突撃してきた化け物に衝突し、再度化け物が吹き飛ぶ。

そして、静かにドアの扉が開かれる。そこから光を纏った無数の物体が高速で飛び出し、ジェイソンの仮面をつけた男に、次々と装着されていく。

下から順に、足から、腰へ、腹部、背中、胸、肩、腕……光を纏った物体は男の体を守る鎧となる。

最後に頭……

その瞬間、光のドアは消滅し、残ったのは化け物と、全身に銀色の鎧を纏い、片手でジェイソンの仮面を持ち、その代わりに銀色の鎧と、お揃いの仮面が装着されている“戦士”だった。

その姿、

その仮面、

その……不気味さ

それは紛れも無く、仮面ライダー。

銀色の仮面ライダーは胸の部分に13の文字が書かれている。

化け物は怯む事なく三度目の突進をくりだした。

だが、ライダーにとってそんな攻撃をいなすのは難しい事でも何でもない。

「直ぐに終わらせてやる」

ライダーは腰に付けた鞘から、柄を握りシャリーンと心地よい音を奏でながら、刃の付いた物を引き抜いた。

それは剣でも無ければ、槍でも無い。ただの鉞だ。<sup>ナタ</sup>

本来武器として使う物では無いが、ライダーは凶器として鉞を振るった。

「処刑する……」

セツナ　化け物の首と体は分裂していた。化け物は激しく血しぶきをあげ、頭と体は同時に地面に沈んだ。

と、死んだ化け物は砂になった。そしてその砂は、ライダーのベルトに吸い込まれ、吸収された。

「雑魚か……」

ライダーは化け物を吸収したのを確認すると、グルツと辺りを見渡す。助けたあの女性は、居ない。

「助けてやったのに……礼も無しか」

そう呟きながら、ライダーは回れ右をする。それと同時に眩い光が放たれ、後ろ姿はすでに人間に戻っていた。

「まあ善意でやった訳じゃないし……礼なんかよりも、やっぱり金だ」

人間の姿に戻った男の顔には、再びジェイソンの仮面が付けられていた……

## 1、処刑人の仮面（後書き）

ふう、なんとなく書きちゃいました。

FFの小説を読んでいたら、仮面ライダーの小説がいっぱいあったので、影響されちゃいました……

さて、まだまだ序盤ですが、これからライダーと達とクリーチャーの、欲望渦巻く戦いが始まります。

では、また次の話で……



2、社長とジェイソン。公園とライダー。（前書き）

今回は少し個性的なもう一人のライダーが登場します。

## 2、社長とジェイソン。公園とライダー。

とある街の、  
とあるビル。

とあるビルの、  
とある社内。

とある社内の、  
とある社長室。

とある社長室の、  
とある社長。

とある社長の、  
とある社長の前の人物。

とある社長の前の人物の、  
ジェイソンの仮面を付けた男。

男が口を開いた。とは言っても仮面により口の動きは確認出来ないが……

「今月は……12体だ。12体の“クリーチャー”を倒した」  
仮面を付けた男は、社長に話しかけた。

社長は白髪まみれの頭に、柔らかそうでサンタクロースの様に白い髭を生やし、老眼のため眼鏡を掛け、小太りだった。

「13（サーティーン）、君は良く働いてくれるね。流石……“処  
刑人のベルト”に選ばれた人間だけあるよ」

「ああ、まあそれより報酬の話を」

「その仮面もとても似合っているよ」

男の話を遮り、社長は自分の話を止めない。

「その言葉は何度も聞いた！」

男の表情は仮面により分らないが、怒っている事は明らかだっ  
た。

（このジジイ……何度同じ事を言うんだ）

「そうだ、報酬だったね……じゃあ最初に鑑別をさせて貰おうかな」  
社長はそう言つて、男に手を差し出した。

「雑魚ばっかだけどな……」

男は着ている大きめのパーカーの下に手を入れる。カチツと何か  
が外れる音がすると、パーカーから出した男の手には何かが握られ  
ていた。

「なるべく早く済ませてくれ」

「分かっているよ」

すると、社長は机の上にあるパソコンと、仮面を付けた男から渡  
された四角い物体を、コードを繋ぎ接続した。

「……うん、確かに12体だね。じゃあ報酬は後で部下に、君に渡  
しとくように言っておくよ」

「……分かった」

そう言つと男は四角い物体を掴み、社長室から出ていく。

小さな子供達が元気に遊び周り、その親達が暖かい視線を送り様子を眺める。

そんな昼間の公園。

平和なその光景……が、直後破壊される。

「きしゃああ！」

響き渡る異形の者の雄叫び。

まるでカマキリをモチーフにしたかの様な、化け物が公園の茂みから突如飛び出し、両手のその巨大な鎌で、子供を引き裂いた。

今度は子供、そして親の悲鳴が響き、公園から次々と人が逃げて行く。

化け物はそれを追うように走り出す。

だが 何かが化け物に飛び蹴りをかまし、化け物は横に吹き飛ばぶ。

「やっと見つけたあ！ 激<sup>げき</sup>だりい」

それはまだ高校生くらいの年齢を思わせる少年だった。

「シャアアアア！」

大量の獲物を逃してしまった怒りか、化け物は少年に鎌を向ける。

「なに？ 俺に歯向かうつての？ 激・ばかじゃねえの！」

襲いかかる化け物。

ふと、少年の腰の辺りを確認すると、そこにはベルトの様な物が巻かれている。

「変身！」

化け物の鎌が首につく寸前、ベルトから光のドアが現れ、化け物

を再び吹き飛ばす。

そしてドアが開かれ、中から飛び出した物体が少年の体に装着されていく。

そして少年の顔にマスクが装着され……少年は仮面ライダーへと変身した。

その姿は、赤を基調とし、腕部は特別厚い装甲を持っていて巨大になっている。

ボディー全体には炎を連想させるような模様が、彩られていた。

「さあてやってやる！」

手をぶらぶらと振り、そして 握り拳を作り、その巨大な腕をフルに使ったパンチで化け物を殴りつける。

怯み、体制を崩した化け物に、隙を与えずまるで弾丸の様なワン・ツーパンチを浴びせる。

そして左フック！ 致命傷になる程の一撃を与え、とどめに化け物の左脇腹に、踏み込み、腰の回転、シフトウエイト全てを完璧なまでに生かしたスマッシュを加える。

ボキボキボキ、と骨が碎ける音と共に化け物の奇声と緑色をした血液が口から吐き出される。

「準備運動にもなっていないぜ？」

最後の力を振り絞り、化け物は両手の鎌を交差させ、ライダーの首を斬り落とさんとする、が 少年はいきなり身を屈め鎌をかわし、化け物に自身の背中を見せる。

化け物が確認出来たのはそこまでだった。

突如強烈な衝撃が体に走り、腹部に大きな穴が空いていた。

それはライダーの後ろ回し蹴りが、化け物の腹部を貫いていたからだ。

化け物は力なく崩れ落ち、砂になる。

そして、ライダーのベルトへと吸収された。

「激・完勝！」

ライダーを光が包み、次の瞬間、公園には少年しかいなかった…

…

## 2、社長とジェイソン。公園とライダー。（後書き）

どうでしたか？新ライダーは。

激・ ！が口癖の少年ライダー！。

13は結構色々なライダーが出てくるので、全員に個性を付けようとしたら、こんなキャラが出来上がりましたw

では、また次話で会いましょう！

### 3、**廃墟ビル。銀色と青色の決闘（前書き）**

今回はライダーVSライダーがメインです。

その前のクリーチャー戦はかなりの手抜き……

最後は意外な結果に？



### 3、廃墟ビル。銀色と青色の決闘

太陽は沈み、月が世界を照らす。

しかし、ここは元より太陽の光など射さぬ場所だった。数年前に廃墟となったビル。

外見は、ガラスが破れ、草花に侵蝕されているただのビル。中は壁が壊されていたり、扉が破壊されていたりする。

そんな廃墟となったビルは非行する少年達の絶好の遊び場となっていた。

未成年の彼等は煙草や酒を飲みながら、居心地のいい様子ではしゃいでいる。

が、突如一人の少年の腹部から角の様な物が飛び出した。

無論、少年の体を貫通して。

おびただしい量の血が、周りにいた少年達に吹きかかり、突如としてそこは凄惨な地獄となった。

「う、うわあああ！」

少年達が逃げ出す。

すると、角の様な物が少年から抜かれ、何かが黒い影から姿を現す。

それはカブトムシをモチーフにしたような化け物だった。

頭部に角を持ち、体全身は棘に覆われた黒光するボディーをしている。

「フウウウ……」

化け物は静かに歩み初め、少年達を追いかける。

ガシャン、ガシャン。

と、音をたてながら近づく化け物の足音は少年達を恐怖させるには十分すぎる程だった。

「？」

化け物が歩を止める。

今度はカッーン、カッーンと足音が鳴り、ピタッと止まる。

化け物の目の前には……ジェイソンの仮面を付けた男が立っていた。

「下の上……で、どこか」

静かに呟き、着ているパーカーの上から、腹部に手をかざす。

そして、化け物の咆哮と、男が呟くのは同時だった。

「ギイイイ！」

「変……身」

光のドアが、パーカーの下に隠れたベルトから現れ、ライダーへと変身するための装備が、開かれた扉から飛び出す。

13と書かれたボディー。

手に持っているジェイソンの仮面。

紛れもなくそれは処刑人のライダーであった。

「処刑する！」

ジェイソンの仮面を捨て、銀色のライダーは先手を取り、化け物に拳をくりだす。

しかし、化け物はそれをいなすと、流れる様な動作で強力なパンチをライダーの顔面にぶちかます。

体勢を崩したライダーに、化け物は思いきり蹴りを放つ。

金属音と共にライダーは後ろに吹き飛び、後ろにある柵や機材等

と激突してしまう。

「痛っ……なかなかのパワーじゃねえか」

だがライダーは立ち上がる。

「下級の分際でえ！」

腰から鉈<sup>ナタ</sup>を引き抜き、今度は斬りかかる。

「おおお！」

渾身の斬撃。

だが 化け物の体を傷付ける事は出来なかった。

その頑丈な体は、鉈の刃を通さず受け止めていたのだ。

「ギイイ！」

化け物は首を大きく振り、頭の角でライダーを攻撃する。

「ぐわっ……」

再びライダーは地面に伏せてしまう。

化け物は追撃に移ろうと、突進の構えを取る。

「あんま調子に乗るなよ」

ライダーは腰の辺りにある銀色のベルトの、中央部分にある四角い物体の上に手をかざし、呟く。

「エボリューション……」

『エボリューション』

ベルトからライダーと同じ言葉が機械で作られた音声で発せられる。

そして、ライダーは鉈で迎撃の構えを取る。

角を突き出した化け物の突進。

その時、化け物の目には鉈の刃が霞んで見えていた。

だが、化け物は迷わず突撃。

そして

吹き乱れたのは、化け物の緑色をした血液だった。  
霞んで見える刃は、化け物を斬り刻んでいた。

超振動。

エボリューション（進化）の言葉と共に発生した現象で、刃の通らなかつた化け物を斬り裂いた秘密である。

化け物は無念そうに砂となり、崩れ落ちる。

「処刑……終了だ」

砂を吸収した後、変身を解除し、男は地面に落ちていたジェイソンの仮面に手を伸ばす。

初めて、男の素顔が明らかになった。

凜々しい顔付きをされていて、不思議な灰色の瞳を持った男。  
自分では自覚していないが、なかなかのイケメンである。

と、仮面に手を伸ばした瞬間　凄まじい殺気を感じとり、すぐさま戦闘体勢に入った。

「出てこいよ……」

男が呟く。

すると、物陰から青年が現れた。

黒い長髪に、冷めた目。

そして、ほとばしる殺気。

「君が処刑人のベルトを持ったライダーか……」  
ゾクッとするほどの不思議な威圧を持った声。  
だが男は眉一つ動かさない。

「何の用だ？」

男が尋ねる。

「決まってるでしょ……」

男はすでに帰ってくる回答を解っていた。

「自分以外のライダーは殺す！」

同時に二人が腰の辺りに手を伸ばす。

「変身！」

更に、同時に光のドアが現れ、互いの体を隠す。

光のドアが消えた次の瞬間、そこにはすでに二人の姿は無く。

存在しているのは、13を冠した銀色のライダーと、まるで空の様な淡いブルーをしたライダーだけだった。

「殺<sup>や</sup>らせてもらうよ」

銀色のライダーに向かい、青いライダーは走りだし、腰から剣を引き抜く。

それは不思議な装飾が施された、青い刃を持つ両刃の剣。

「処刑人！ 名前、聞かせてくれない？」

鉦を抜いた銀色のライダーと、つばぜり合いになると、青いライダーは問いかける。

「先にお前が言え……」

両者一步も退かず硬直した状態になる。

「僕？ 僕は、仮面ライダー……“ミトス”」  
「そうか……俺は」

廃墟の中の殺伐とした空間に、一瞬の間が出来る。

静かに風が流れ……そして、一気に強い風が吹き荒れる  
と、同時に　銀色のライダーが口を開いた。

「NO13、ヴァルスだ！」

「ちっ  
」

言い終わった瞬間　鉈を操り、銀色のライダー、ヴァルスは、  
青いライダー“ミトス”の剣を弾く。

無論、それで終りでは無い。

それは次に行われる攻撃への繋ぎ。

そしてそんな事は、ミトスにも解っていた。

だからこそ舌打ち。

「うオオオツ！」

ヴァルスは剣を弾かれ、隙だらけの敵の胴体に、なんの慈悲も無い、神速の横薙を見舞う。

「ぐうっ  
……」

鉈の刃とミトスの装甲がぶつかり合い、火花が散る。

そして、この絶好の好機を見逃す筈も無く、無慈悲な斬撃の嵐が  
ミトスを襲う。

ミトスは何とか剣を握りしめ、振り払おうと試みる……が、それ  
よりも疾やく（はやく）まるでフェンシングの様な強力な突きが、  
ミトスの胸部に炸裂する。

鉈には刀頭が存在しないが、今の突きをもろに受けたミトスは、  
そのダメージの大きさを痛感していた。

突きをくらい、ミトスは大きく後ろに吹き飛ぶ。

ミトスが周りにある機材に倒れ込み、再び静寂が戻り、今までほ  
とばしっていた火花と金属音は、嘘の様に無くなっていた。

「相手が悪かったな……」

銀色のライダー、ヴァルスが床にひれ伏したミトスを嘲笑いながら見下す。

「油断していただけさ!」

一瞬の油断。

戦場ではそれが命取りになることくらい解っていたが、相手との距離が離れた事により、安心という名の油断をしたことは、紛れもない事実だった。

そして、一瞬の隙を見つけたミトスが反撃を開始する。

「オペレーション!」

『オペレーション』

ミトスの腰のベルトから、機械音が発せられる。

更に、それに呼応するかの様にミトスの剣が形を変える。

徐々に剣全体が巨大化していき、片手で扱っていた剣が、人の背丈程もある大剣へと変貌していた。

「そうら!」

リーチをいかし、大きく横に剣を振るう。

周りにあった機材を巻き込みながら、一撃必殺の威力を持つ斬撃が繰り出される。

「つと」

受け止められないと察知したヴァルスはバックステップで斬撃を回避する。

大きな武器程返しが遅い。

それを見きったヴァルスは振り抜いてしまい、隙だらけのミトスに接近し、斬りつけようとする、が……

「……!?!」

ミトスは大剣を振り抜き、制止するのではなく、そのまま一回転しハンマー投げの要領で、遠心力を付けた二撃目をヴァルスにぶちかます。

「ぐああ！」

起死回生の一撃を受け、今度はヴァルスの体から火花が散る。

「ハア、ハア……」

「油断は大敵だね」

間を置かず、ミトスはもう一度大剣を横に薙払う。

「お前もな！」

『エボリューション』

今度はヴァルスのベルトから機械音が発生し、超振動で鉈の刃が霞む。

そして、ミトスの大剣に向けて、ヴァルスは鉈を振り下ろす。

「え？」

ミトスに予想外の出来事が起きる。

絶対の信頼を置いていた自分の武器が、よもや武器ですらない“鉈”等というものに受け止められ、更に剣の刃が削り取られているのだ。

「超振動か……」

だが、冷静に見切り素早く鉈を弾き、距離を取る。

「仕方ないか……あれを使おう」

「ん？」

何か来る、そんな予感がした。



癒される様な優しい風が吹き、段々とそれがミトスを中心に渦巻いて行く。

優しかった風は突如強風となり、ミトスの体に纏われる。

「フル・オペレーション」

『フル・オペレーション』

ベルトに手をそえて、眩く。

次の瞬間、かき消されたかの様に、風が消えていた。

代わりに現れたのは、所々変化の見られる“蒼い”ミトスだった。

「全力でやらせてね」

「はっ、さっきまでは手加減してたとしても？」

「そうだよ……」

巨大な剣を持っているにも関わらず、先ほどまでとは比べ物にならない速度で、ミトスが一気に接近する。

『スパイラル！』

ベルトから機械音が発生し、大剣の刃に風が渦を巻くように現れ、風を纏った一撃がヴァルスに襲いかかる。

危険を察知し、鉈で防御の構えを取るが……

超振動を起こしている鉈を伝わり、凄まじい衝撃が伝達され、振り抜かれた一撃により、ヴァルスは廃墟の壁をぶち破り、外へと放り出されてしまった。

と、同時に纏っていた鎧が消え去り、変身が溶けてしまう。

「ハアハアハア、クソ……」  
不覚。

灰色の瞳を持った男は、廃墟から近づいて来る足音に……

逃げ出した。

トレードマークであるジエイソンの仮面も付けずに。

### 3、廃墟ビル。銀色と青色の決闘（後書き）

ふう、なんかあっけない戦闘ですね……

あ、それより、いきなり主人公ライダーがやられちゃいましたね。しかも、敵は三話目からすでに第二形態（龍騎というサバイブ、フアイズというブラスターフォーム、だっけ？ブレイドというジャックフォーム）に変身出来ちゃったり……

まあ主人公を特別強くしないつもりなので、こんなもんです。

では、！

#### 4、遭遇。（前書き）

今回、うざい視点移動がありますが、出来れば頑張って読んでみて下さい……

今回は再び彼が登場！

#### 4、遭遇。

「うおお！ これはヤバイ……」

「また金欠か？ 烈<sup>レツ</sup>」

「あ、ああ全財産が100円になってしまった」

二人の男子高校生の通学風景。

「うう……最近楽な仕事ばっかだったからなあ」

「そっぴゃあ、お前何のバイトしてんの？」

「ん、ああ秘密だ」

「なんだよそれ」

何も無い。

ただ、昨日と同じ、明日も同じ そんな平凡な一日。

健全で、光に包まれている。

闇。

男を包むのは。

落ち着きのある茶色をメインに、それでいて華やかさもあるビルの一室。

机越しに二人の人物が話している。

一人は白髪とサンタクロースの様な髭を生やし、眼鏡をかけた老人。

そしてもう一人は、ジェイソンの仮面を付けた男。

「処刑人、君ですか。 わざわざ社長室にまで、なんの用ですか？」

「聞きたい事がある」

ジェイソンの仮面を付けた男は、椅子にかけている老人に話かける。

「私の知るかぎりでしたら、何でもお話しますよ」  
ひどく優しい笑顔で、老人は答える。

「まず一つは……“ミトス”で青いライダーは何番目だ？」

自分が敗北した相手、ミトスについて、ジェイソンの仮面を付けた男は尋ねる。

「ミトス……彼と戦ったのですか？」

「ああ」

「負けましたね」

「ああ……」

「やはりそうですか、まあ今の貴方では及ばない相手でしょうね」  
いつのまにか話がすり変わっている事に気づく。

（くそっ、このジジイ……やっぱりボケてんのか？）

「彼はですねえ……7番、ですね」

「7……か、それともう一つ」

「はい？」

「奴の、ミトスのした二段変身はなんなんだ？」

あの力。

あれさえ無ければ、自分の方が優勢だった。

「ミトスの“扉召喚”は確か……」

老人は机に備え付けられているパソコンを操作し、ディスプレイに現れた情報を読み取っていく。

「そうそう、オペレーション。でしたね」

「そうだ」

老人はパソコンから目を離し、再びジェイソンの仮面を付けた男を見据えながら言う。

「ならば、フル・オペレーションですか……」

ジェイソンの仮面を付けた男は、無言で頷く。

「あれは……吸収したクリーチャーの力を自分の力に還元し、パワーアップした姿。貴方のヴァルスのベルトも、いや、全てのライダーのベルトで同じ事が可能です」

「なに？　だが俺は……」

「まだ、出来ないだけです」

自分が言おうとしたことを見破られた。

男は老人の放つ不気味なオーラを感じとり、一瞬体が硬直する。

「……何故？」

硬直する体に鞭を打ち、何とか言葉を発つ事が出来た。

「狩ったクリーチャーが少ないのですよ」

「ハッ、単純だな。戦えば戦うだけ強くなる、か」

少しテンションが上がる。

「貴方の場合……あと3体程、中以上のクリーチャー、もしくはライダーを一人でも倒せれば、発動出来ると思いますよ」

その言葉を聞いた瞬間、仮面に隠れた男の灰色の瞳が輝く。  
勿論誰にもそれは解らない。

「ククク、そうか」

男はクルリと後ろを向き、老人に背を向けた。

「失礼する、社長」

そう言い残し、男は部屋から出て行く。

とある町の公立高校、校庭では体育の授業が行われている。  
一人の男子生徒が、転がって行ったボールを探しに、草やぶに足

を踏み入れた。

その時、突如男子生徒の頭上に何かかのしかかり、男子生徒を踏み潰した。

緑の体色をしたバツタの様な化け物。

踏み付け、自分の足の下でもがく男子生徒を、鋭い爪で引き裂き、肉を口に運び頬張る。

そして、化け物は校庭にいる全ての人間に襲いかかった。

「先生！ 腹が痛いのでトイレに行つて来ます！」

校舎内で授業を受けている一人の生徒。

「おいおい烈、漏らすなよお」

友人と思われる少年が、冷やかしの言葉を投げかける。

「このままじゃ漏れる！」

彼はついに先生の許可を無しに教室を飛び出す。

しかし、向かう先はトイレでは無かった。

「きゃあああ！」

「うわあああ！！！」

校舎にいた生徒達が、化け物に気付き、悲鳴を上げる。

一人の女子生徒が、化け物に捕まり、その鋭い爪で引き裂かれ、真っ赤な血が飛び散る。

その間に、他の生徒達は校舎へと逃げ込んで行く。

化け物もそれを追うように走りだす、が……

「お前の相手はこの俺だ」

声の方向へと振り返った。



「てめえ、俺の憧れの美香ちゃんになんて事しやがる！」  
それは一人の生徒、烈と呼ばれた少年だった。

「マジ……ムカつく」

制服の上から、腰の辺りに右手を添え、左手を化け物に向けて伸ばす姿勢。

そして少年は叫んだ！

「激・許さねえ！ 変身！」

光のドアがベルトから召喚され、扉が開かれる。  
眩い扉の向こうからライダーとなるべくパーツが飛び出し、少年に装着される。

「おおお！」

赤を基調とし、腕部が強化されているライダーが、バツタをモチーフしている化け物に突撃する。

赤いライダーは、ボクシングの構えを取り、小刻に肩を揺らし、化け物の目前にジャブを放つ。

だが、それは畏でしかない。

ライダーの行動に反応してしまい、化け物はライダーに攻撃を仕掛ける。

その攻撃を紙一重で避け、まだ前方に体重のかかっている化け物に、カウンターのストレートを放つ。

その強化されている腕から放たれるパンチの威力は、常識を超えた破壊力を備え、化け物の顔面を砕く。

「一気に終らせるぜ」

一瞬で、腰のベルトを小刻に軽く叩き、それに共鳴し赤いライダーの眼光が輝く。

『コンビネーション』

鳴り響く電子音、その直後　目にも止まらぬ速さ、そして絶対の破壊力を持つ左ショートフックの連打。

驚くべきは左右のコンビならまだしも、左だけでこの数のパンチが放れた事、そして　零距离からの攻撃にも関わらず、圧倒的な威力であること。

『1（ワン）』

すぐにでも吹っ飛びそうな意識の中、なんとか左のショートフックに耐えてきた化け物に、突然の右フック。

思いきり回転を加えた、これだけでも必殺の威力を持つ一撃を、化け物の左頬に炸裂させる。

「激・爽快！　だが、まだまだあ！」

『2（ツー）』

続けざまに電子音、今度は地から天へとかけ登る龍の如くアップ、化け物の体が宙を舞う……事は無かった。

ライダーが片方の手で化け物の腕を付かんでいたのだ。

「うおらああ！」

そして、続けざまに天から地へと落下する隕石の如く踵落とし。化け物の頭は既に原形をとどめていない。

『3（スリー）　ライダーキック』

「激・終りだああ！」

ライダーの片足に炎が宿り、化け物はライダーの背中を見た。

次の瞬間放たれたのは、炎を纏った後ろ回し蹴り。

化け物の体を蹴りが砕き、炎が焼き付く。  
そして、化け物の体は砂になる。

「激・楽勝！」

赤いライダーは変身を解こうとする、だが、ここで姿を見られるのは不味いと思い、ライダーのまま学校の外へと走り去って行く。

「反応が……消えた」

ジーパンにパーカー、地味な服装だが、その灰色の瞳が印象的な男が、とある学校の前で呟いた。

「他のライダーの反応も確認したからな……先を越されたか？」  
と、その時、何かが男にぶつかる。

「痛っ、ん？」

「あ、すいません！」

それはこの学校の生徒と思われる少年だった。  
灰色の瞳を持った男は、目を細め少年を見つめると、何も告げずにその場を後にした。

「おお……なかなかのイケメン」

少年は男の後ろ姿を見つめながら、ボソツと口にした。  
そして、少年は学校の門を飛び越えて学校に侵入する。

灰色の瞳を持った男は、人気の無い場所に移動しながら、パーカのポケットからジェイソンの仮面を取り出し、呟く。

「次こそは……」

少年は、拳を握りしめ、得意のボクシングのスタイルで構え、叫

ぶ。

「まあ、なにはともあれ……」

「処刑する！」

「激・完勝！」

二人が交わる時は近い。

#### 4、遭遇。（後書き）

ふう……感想を貰って初めてライダーキックの事を思い出した、僕です。  
すっかり考えて無かった……ので、かなりの後付けになっちゃいました。

そついや今回は、激・の少年、烈が再び活躍しましたね。

彼の必殺技は、得意のボクシングと、天性の格闘センスを融合させたコンビネーション。

1、2、3はカブトのパクリとかそんなんは、知りません（笑）  
（笑い事じゃすまないか？）

格闘技に詳しく無い人には分かり辛かったですでしょうか？

自分も詳しい訳ではありませんが、一応簡単な説明でもしてみますか。

まずは、左のショートフックの連打で相手の体制を崩す。（大抵はそこまで高い威力は望めないものだが、少年のは十分致命傷になります）

そして今度は右フック。腰の捻りを存分に加えた物なので、破壊力は抜群！

これが、1

さらにアッパー、体の何処かを掴み、固定し、踵落としも加えます。これが、2

とどめに回転後ろ回し蹴り（ライダーキック）をぶちかまし、終了です。

これが、  
3

じゃ、今日はこの辺で、また次の話で会いましょう

## 5、ライダー狩り（前書き）

またまた新たなライダー登場！

更に烈のライダーの名前も判明する！

そして物語中盤のキーパーソン、ライダー狩り登場！？

そっぴやまだ何で戦ってんのかとか不明でしたね。

そろそろそっぴいう事も説明しなきゃな……

## 5、ライダー狩り

「クハッ、気付いてるぜ。隠れて無いで出てこいよ、ここまでく  
りゃ、人目にはつかないぜ」

とある林の中、一人の男が誰もいない空間で……否、一人では無  
い空間で、何者かに語りかける。

男が動くたびに、ジャラジャラとアクセサリーの揺れる音がする。  
異常な程にアクセサリーを付け纏い、黒いロングコートを着た男  
は、独特な笑い声でニヒルな笑みを浮かべる。

「クハハハッ、いつまで隠れてるんだって言ってるだろ！」

男が腕を振り上げると、それに呼応しジャラジャラとコートの袖  
の中に隠れているアクセサリーが鳴りだす。

そして、男は横一線に腕を払う。

放たれた真空波が、前方の木を破壊する。

「血の気の多い奴だ」

破壊された木の後ろから、20代前半の、眼鏡をかけた知的そ  
うな男が現れた。

「クハッ、早速始めるぜえ！」

アクセサリーを付けた男は、みるみる体を変化させていく。

紫色の体色に、体のいたる所が尖った鎧の様なボディ。

クワガタの様な二つの角を頭部に持つ化け物へと変身した……否、  
正体を表したと言った方が正しいのだろう。

「中の上か……変身」

男は腰に巻いてあるベルトに手を置き、呟く。



そして、光のドアが現れその扉が開き、中から飛び出して来るパ  
ーツが男を包む。

男の体を鎧が包むと、光のドアがこなごなに砕け散る。

それが戦闘の合図になった。

「俺は仮面ライダー“アスプ”……倒される相手の名前くらいは聞  
きたいだろう？」

緑色のライダー、アスプは紫色の化け物に向かい宣言するが、動  
く気配は無い。

「クハハハッ、そうか。 なら、俺の名前はレイゲル・クリーチャ  
ーだ！」

「クリーチャーの名前等に興味は無い……」

「しけた事いうなよなあ！ オイツー！！」

一瞬にしてレイゲルの姿が、緑色のライダー、アスプの眼前から  
消える。

「なっ！？」

アスプは手をダラリと下げたままではあるが、レイゲルの気配を  
探り、神経を集中させる。

「そつらよお！」

次にアスプがレイゲルの姿を確認したのは、レイゲルの一撃を受  
けてからだった。

いつの間にか背後に移動していたレイゲルのパンチを受け、よろ  
めく。

（高速移動か？）

レイゲルはさらに乱雑に、アスプにパンチのラッシュを浴びせて  
いく。

「くうっ……」

レイゲルの前蹴りを受け、アスパが吹き飛び両者の間に距離があく。

『イビルレガード』

アスパのベルトから電子音が鳴り、再び光のドアがベルトから現れた。

中からは、蛇の牙を思わせる武器が飛び出す。

「だが、どんなに早くてもコイツで斬れば……」

柄は一つだが、鐔からは二つの刃が伸びている、まさに蛇の牙の様な剣を構え、レイゲルを迎え打つ。

「クハッ、何か勘違いしているようだから教えてやるぜ！ 俺の能力は高速移動なんかじゃねえぜ」

「……」

「空間移動だ！」

直後、再びレイゲルの姿が消え、次の瞬間アスパは激しい衝撃に襲われていた。

紫色の残像がアスパの体に攻撃を仕掛けていく。

右から攻撃を受け、左へ倒れそうになると、直ぐ様左から強烈な攻撃が加えられ、強制的に立ち上がらせる。

「クハハハハハハハハハハ」

レイゲルの高らかな笑い声と、アスパのボディが軋む音が林の中に響き渡る。

「終りにしてやるぜ！」

レイゲルは、すでに立たされているだけのアスパの正面に立ち、首を大きく振るい、頭の角を使い横薙にしてアスパを吹っ飛ばす。

渾身の一撃を受けたアスパは勢いが付いたまま後ろの木にぶつか

り、気を失う。

「つまんねえ！ もう終りかよ」

ゆっくりと、木に倒れかかっているアスプに近付き、止めを刺そうとする。

しかし 突如アスプが剣を握りレイゲルに斬りかかる。

「不意打ちか？ だがなあ」

ガキン、とアスプの刃は硬質なレイゲルな腕によって阻まれてしまった。

「だが、なんだ？」

攻撃を弾かれたのに、嫌に冷静なアスプ。

「無駄だつてんだ……よ……」

拳を振り上げ、殴り付けようとするが、腕が上がらないのだ。

「何を……した？」

「フツ、形勢逆転だな。油断などするからだ」

斬撃を受けた手を抑えるレイゲルを鼻で笑い、アスプは話始める。

「このポイズンスネークに“噛まれた”者は、毒に犯され、石となる」

「なんだって！」

「さあ、貴様も俺の糧となれ！」

剣を振り上げ、レイゲルに狙いを定めるが、それよりも速くレイゲルの回し蹴りがヒットし体制を崩す。

「ちい、冗談じゃないぜ」

両者の間に沈黙が流れる。

そして、その沈黙を破ったのは意外な者だった。

「グシャアアオオオ」

木を倒しながら、何かが急速に二人のいる場所に接近していたのだ。

「なんだなんだあ」

楽しそうな笑みを浮かべ、レイゲルは向かって来る何かを見つめた。

「グシャアアオオオ！」

もの凄い速さで突進してきた何か、がレイゲルの体を吹き飛ばす。  
「グハアッ」

強烈な衝撃と共にレイゲルは後ろにあった木にぶつかる。

レイゲルに突進した何かは茶色い体に、頭部に二本の長い角を持ったバッファローのような化け物だった。

「仲間割れか？」

アспはその光景を静かに眺めていたが、化け物が今度は自分に向いたのを見て前言撤回をする。

「無差別に……か」

突進　だが、アспは横に転がり難無く回避する。

化け物は勢いが止まらず、更に突っ込んで行き木を薙ぎ倒している。

「今回は逃げた方が良さそうだな……」

アспはそう言うと、周りを確認する。

既にレイゲルの姿は無く、逃げたのだと確信すると、アспも直ぐにその場を離れた。

ライダーめ、次はブッコロスぜ。　クハハハハハハハハハ！

既に日は昇りきり、太陽が赤く光る夕方。

一人の男子生徒の前に、男が立ち塞がる。

男の服装は、異常な数のアクセサリーに、黒いロングコート。

「あのー何か用スかあ？　忙しいんですけどねえ」

「クハッ……ああ用があるんだよ」

「くは？　えと、なんですか？」

「ちよつと付いて来てくれませんか……仮面ライダーさん」

男子生徒の目が変わる。

「激・正体ばれてやがる」

男子生徒は笑いながらアクセサリーを付けた男に付いて行った。

「ここなら、存分にやれるだろ」

案内された場所は、今は封鎖されている街の地下だった。

既にボロボロになっているが、昔は賑わっていたであろう店が多数並んであった。

「アンタ、何者？　ライダー？　それとも……」

「クハッ、クリーチャーだ！」

紫色の線が身体中から現れ、それらが男の体を縛り付けると、男の体は変化し、鎧に包まれる。

「変身！」

少年もベルトに手を添えて叫ぶ。

光のドアが召喚され、中から赤いパーツが飛来する。

そして……光のドアが弾け、そこには赤い炎を彩った様な仮面ライダーが、拳闘スタイルで構えていた。

「おっと、戦う前に……俺の名前はレイゲル・クリーチャーだ！」

「ん？　なんだよ突然」

「お前を倒す相手の名前だ」

レイゲルはアスプから聞いた事を真似していた。

「へえ……まあ一応、俺は仮面ライダー“ウインエ”」

「そうか……じゃあ、殺らせてもらうぜ！」

突如、レイゲルの姿がウインエの眼前から消える。

一瞬でウインエの横に移動したレイゲルが、拳を繰り出す。

だが、ウインエは攻撃が当たる瞬間に、体を反らし衝撃を減らす。

「激焦つ（げきあせ）！」

「クハッ、やるじゃねえか」

更に連撃……だが、華麗なウィービークで攻撃を避け、手で攻撃を受け止め、または受け流し、一撃も当たらずにいた。

「反撃い！」

レイゲルの振り上げた拳よりも、ウインエの左ジャブの方が速くレイゲルの顔面に決まり、レイゲルは拳を振り下ろせない。

そこへ、左手を引くと同時に腰の回転をフルに使った右ストレートが炸裂する。

「うぐあ」

レイゲルの体が地面を滑る。

「激弱！」

拳闘スタイルは崩さず、ウインエが叫ぶ。

「今度はこっちの番だ」

レイゲルが手を出すと、紫色の糸が現れ、それが束ねられ、何も無い空間を縛る。

勿論、何も存在しないのだから空を裂くが、何故かそこから紫色の刃を持った剣が出現した。

「クハッ！」

得意の空間移動でウインエの後ろに移動、そして現れた剣を背後からウインエに叩き付ける。

「うがつ」

激しく火花が散り、ウィンエがよろめく。

更にレイゲルは何度も何度も高らかな笑いと共に、剣を叩き付ける。

[illegible]

狂つたように笑い出し、手を休める事なくウインエが倒れるまで斬り付ける。

「ぐっはあ……」

強力な斬り上げを受けウィンエは後方に弾かれる。

「はあっはあっ、**激ウザ!**」

ウィンエの装甲は切り裂かれ、ボロボロになっているが、その闘志は消える事は無く、再びレイゲルに向かって行く。

## 『コンビネーション』

ベルトに手を沿えると、電子音が響く。

と、同時に繰り出される左フック。

☐ コンビネーション 1 ☐

左だけでこれほどまで打てるのだろうか……と、誰もが驚く程の無数のパンチを打ち出す。

「ぐうぐう……」

なんとか左フックに耐えていたレイゲルに、今度は会心の右フック。

『コンビネーション2』

ボキボキ、と骨が粉碎する音が鳴るが、更に顎を貫くアッパーが決まる。

だがまだ終わらない。

体が浮かび上がるレイゲルの手を掴み、頭蓋骨を砕く様な踵落とし。

『コンビネーション3、ライダーキック』

「おおお！」

「舐めるなあ！」

力を振り絞り、レイゲルは剣を振るう、だが 姿勢を下げた下げた下げたウインエにはかするだけとなり、直後強烈な後ろ回し蹴りがレイゲルの腹部を砕く。

「ぐああああ！」

炎に包まれながら吹っ飛んだレイゲルは、100M先のコンクリートの壁に直撃し、どうにか止まる事が出来た。

「はあはあ、どうだあ！」

しかし、レイゲルは立ち上がる。

膝はガクガクと震え、フラフラとしているが、剣を握り直しまだ戦える事をアピールする。

満身創痍と言った状態だが、ウインエの方も余裕がある訳ではない。

「クハッ、クハッ……効いたぜえ、今のは」

だが、相当のダメージを負っているはずのレイゲルが笑みを浮かべる。



「次は80%だあ！」

「本気じゃなかった……の……があつ！」

言い終わる前に、レイゲルがウィンエの前に現れ、腰を回転させて上半身全体を回し、遠心力を加えて頭の角でウィンエを殴り付けると、衝撃波が発生し、今度はウィンエがコンクリートの壁に激突する。

「うわああ」

コンクリートに衝突した衝撃で変身が解除され、烈は気絶してしまった。

「クハッ、なかなか面白かったぜ……」

レイゲルは気絶した烈を見下すと、止めを刺さずその場を去って行った。

「クソッ、消えたか」

ジーンズを履いた男が街外れの路地で呟く。

「かなりの反応だったか……先を越されたか？ 他のライダーの反応もあつたからな……」

そして、男はパーカーを着ている。

「反応は地下からだつたが……何処から行けばいいのか……」

更に男は……ジェイソンの仮面を付けていた。

## 5、ライダー狩り（後書き）

さあどうでしたか？

なんか意味不明だったライダー狩り・レイゲルと仮面ライダーアスプ。

しかし……本当に今の所謎だらけだなあ……

しかも主人公活躍してないし……

まあまだ5話目ですかね。

あ、ちなみに13は毎週日曜日に更新しますので、よろしく願います。

感想、質問等々お待ちしております。

6、社長×ライダー。クリーチャー×ライダー（前書き）

あああ！

日曜日更新すんの忘れてたあ！

## 6、社長×ライダー。クリーチャー×ライダー

女性と見間違えるほどの美しい黒髪。

寒気のある様な冷たい瞳。

形の良い眉毛。

そんな青年の前にいるのは白髪を生やした温厚な眼差しの老人。

彼はそう　あの廃墟となった工場で13番、処刑人・仮面ライダー“ヴァルス”と戦い、勝利した仮面ライダー“ミトス”だった。

そして机を挟み向かい合う老人は、この社長室の主・社長である。

「社長、報告があります」

冷たい瞳で社長を見据え、手に持った報告書を社長に見せる。

「ありがとう、仮面ライダーミトス君」

青年とは対象的に、老人はまるで太陽の様に温かい目で青年を見つめ、話す。

「いや、ここでは“カイセ海瀬 ミツル満”と呼んだ方が良いかな？」

ニコニコと微笑み、社長は青年　海瀬満を眺める。

「どちらでも構いませんよ……それより、報告に入らせて貰います」  
青年は表情を変える事なく、まるでロボットの様に予め用意された言葉を唱える。

社長はそんな青年を、いつものこと、と気にせず海瀬の言葉に耳を傾ける。

「報告は二つ。　しかし、内容はいずれも同じ、あるクリーチャーについてです」

海瀬はさらに淡々と紙にかかれた文を読み上げる。

「一つは“霧雨 大、仮面ライダーアスプから……もう一つは、本<sup>ホ</sup>条<sup>ジョウ</sup>烈、仮面ライダーウィンエから」  
表情は变えず、社長はニコニコと微笑みながら海瀬の報告を聞く。  
海瀬は更に機械の様に、紙を読み上げて行く。

「どちらの報告も、一体のクリーチャー……レイゲルと名乗る中の上のクリーチャーについてです」  
「名前まで分かっているのですか」  
「そのようですね。ちなみに、霧雨からの報告によると、空間移動という非常に厄介な能力を持っている、と」  
「なるほど、それで？」

そこは邪悪な二つの気がぶつかり合う混沌の空間。

二人の男が向かい合い、睨み合う。  
封鎖された遊園地の敷地内で、それは行われていた。

「三人目……お前も潰すぜ！」  
「やってみろ……」

二人の男が口を開く。  
「ああ、やってやるぜ、その仮面も剥ぎ取ってやるよ、クハハハハッ！」

「よく喋る奴だ……処刑する」

アクセサリをジャラジャラと大量に付けた男の体から、紫色の触手の様な物が浮かび上がる。  
「クハハッ、楽しませろよお！」

それに向かい合う、ジェイソンの仮面を被った男も、腰のベルトに手を添える。

「変……身」

「霧雨は戦闘中に別のクリーチャーに襲撃され、レイゲルに逃げられた。と、そして本條は戦闘に敗れ、気を失ったが何故か何もされていないと報告にはありました」

「なるほど、ただ戦いたいだけ……というタイプのクリーチャーですか」

「何か目的があるのかもしれませんが」

報告を終え、考察が始まる。

そして、それと同時に戦闘が開始された。

銀色の仮面ライダーヴァルスと、紫色のクリーチャーレイゲルが、互いに走り出す。

そして、それを見守る二つの影が、息を潜めていた。

## 6、社長×ライダー。クリーチャー×ライダー（後書き）

仮面ライダーミトス、彼が再び登場しましたね！

そして更にレイゲルと、主人公が同時進行で戦うという状態。

まあそれはそうと携帯を変えたら、更新すんのが大変になりました

……

## 7、襲い来る影（前書き）

レイゲルとヴァルスが戦う中、それを見つめる二つの影が……



## 7、襲い来る影

「おおおっ！」

殺意を籠めた雄叫び。

両者の武器が敵の体を切り裂かんと振るわれる。

だが攻撃は弾かれ、避けられ、防がれる。

互角。

まだどちらも本気を出してはいないが、ここまでは少なくとも互角である。

銀色のライダー、ヴァルスが腕を振るい、鉈の刃を疾らせる。

輝かしい閃光と共に斬撃が、紫色の鎧を纏ったレイゲルに向かって放たれる。

しかし、例に漏れずこれもまた防がれる。

不快感を誘う独特な笑い声を発しながら、自身の剣で、相手から放たれた斬撃を叩き落とす。

と、今度は反撃、隙の出来たヴァルスに一撃必殺の突きを繰り出す。

「クッ  
ッ」

体捌きだけで何とか突きを避けるが、明らかな隙が出来てしまう。

紙一重でかわし反撃するつもりだったが、計算が狂う。

動揺と同時に生まれた焦りが、判断を鈍らす。

相手との力が互角なだけに、これほど危険な事は無い。

「クハハハハアッ貰ったああ！」

レイゲルの剣がヴァルスの体を捉える。

だがヴァルスとて素人では無い、判断が遅れたとは言え、必要最低限の行動は取った。

少しでも威力を吸収するためにバックステップし、レイゲルの刃は浅く胸部を切り裂くだけとなる。

「クハッ、やるじゃねえかよお！」

「……」

高笑いを浮かべ、立ち止まったレイゲルに、ヴァルスは無言の一撃。

無慈悲で暴力的な、蹴撃。しゅうげき

狙いすましたように相手の視界の外から、意識を刈り取るが如く放たれた右ハイキック。

一瞬で、たった一撃で、戦況が変化する。

『エボリューション』

機械音が響き、同時に鉈の刃が振動し、霞んで見える。

ヴァルスはそれを、よろめくレイゲルの胴体に叩き込む。

摩擦を限りなくゼロに近付け、頑丈なレイゲルの体を引き裂く事は無かった。

移動したのでは無い、消えたのだ。

完全にバランスを崩していたのにも関わらず、ヴァルスの視界からレイゲルが消える。

「なんだとっ!?!」

「クハハッ!」

いつの間にか背後に回り込んでいたレイゲルから振り下ろされる一撃。

激しい火花を撒き散らしながら、ヴァルスは地を這う。

「ぐっ」

「クハッ！」

地面にうつ伏せに倒れたヴァルスに、レイゲルの剣が追撃を見舞う。

なんとか地面を転がり攻撃を回避するが、さらに攻撃が迫る。

「舐めるなよ」

倒れたままレイゲルの体に蹴りを放ち、その隙にヴァルスが立ち上がる。

「おおお！」

ヴァルスの拳がレイゲルの体に無数に突き刺さる。

粗が目立つデタラメなパンチながら、数とスピード、そして高い攻撃力でレイゲルを圧倒。

更に反撃しようとレイゲルが動いた瞬間に右足をしならせた回し蹴り。

「ぐああっ」

「はあああ！」

そして止めに鉈でレイゲルの右肩から左の腰の辺りまで切り裂く。超振動を起こしている鉈の刃は、容易くレイゲルの体を傷付ける。

今度はレイゲルが地面に伏せる番となった。

だが、それで終わる訳では無い。

次の瞬間、レイゲルは地面に激しいキスを迫る事となった。

うつ伏せに倒れたレイゲルの後頭部をヴァルスが思い切り踏みつけたのだ。

「ごふっ……」

「処刑だ……」

頭をぐりぐりと足で踏みつけ、鉈を天に掲げる。

しっかりとストップピングされてるため、得意の空間移動も出来ず、完全にレイゲルの負けが決まった。

だが レイゲルの背中から触手の様な物体が飛び出し、ヴァルスを襲う。

慌ててレイゲルから離れるヴァルス、レイゲルは背中から数本の触手の様な物を出しながら立ち上がる。

「クハッ、クハハハハッ！ 面白いなあ、テメエ！ 今までの中じゃ一番強かったぜ！」

「……処刑する」

レイゲルの言葉に耳を貸さず、鉈の柄を握りしめる。

レイゲルは独特の笑い声をあげながら、それに応戦するように剣を構えた。

そして、両者が同時に駆け出す。

両者の武器が交わる 瞬間、二つの何か、がヴァルスとレイゲルに突進し吹き飛ばす。

「ぐあっ！」

「なんだあ！」

両者の前には、別々に二匹のクリーチャーが立っていた。

それを見てレイゲルは悪態を吐く。

「てめえはあ！」

二本の黒い大きな角を持った、バッファロー型のクリーチャー。

それはレイゲルと仮面ライダーアスプが戦っていた時に乱入した、レイゲルにとって忌まわしい存在。

「ククククク」

ヴァルスはチラッとレイゲルの方を確認すると、直ぐに前を向く。自分の前にもクリーチャーがいる。

馬の様な輪郭をした、白いクリーチャー。

「クハッ、丁度いい、お前もいつかぶつつぶしてやろうと思ってたんだ！」

「なんであれクリーチャーは処刑する！」

二人は同時に、自分の前に現れた邪魔者を排除しにかかる。

ヴァルスの目から見て、馬の様なクリーチャーとレイゲルの前にいるクリーチャーが組んでいる事は一目瞭然だった。

馬の様なクリーチャーは、レイゲルの前にいるクリーチャーに比べ、荒々しさも、凶暴性も感じられない。

知的で、高貴な雰囲気漂う。

実際、このクリーチャーは種族の中でも高位に属する存在だった。素早い移動、剣と盾という武器を巧みに操る攻撃、更には眼から光線を放つ事も出来る。

極めつけに言葉を喋る事が出来た。

「お前……が、ライダー……か……？」

「喋れんのか？」

「ライダーは……殺す」

「やってみな！」

レイゲルとバッファローの様なクリーチャーは、既に激突していた。

こちらはヴァルスの相手の様に喋る事の出来ない下級の存在のようだった。

「がむしやらだが、厄介な野郎だぜ」

バッファロー型のクリーチャーの突進をかわしざまに、後ろから斬り付ける　　が、走っているため浅い傷を付けただけとなる。

バッファロー型のクリーチャーはレイゲルの攻撃を喰うのと同様

に、後ろ足でレイゲルを蹴り飛ばす。  
「ぐつはあ……やるお！」

確かに、このクリーチャーは高位な存在だった。

だが、この男の前では位など関係無く。

自身の力等役に立た無かった。

「この程度！」

いくら速く動こうが、レイゲルの様に空間を移動する訳では無い  
ため、動きを見切られてしまう。

そして武器の使い方も、ヴァルスの方が一枚上手だった。

反撃するチャンスを与えず、ヴァルスはクリーチャーを斬り付け  
て行く。

「ライダー……め」

クリーチャーの両目が光る。

これは光線を放つ合図だ。

「無駄だ」

まさに光線が発射されようとした瞬間、斬撃がクリーチャーの両  
目を切り裂く。

「ぶしいう！」

声にならない悲鳴を上げて、クリーチャーは目を抑える。

絶好の隙が出来た。

それを見逃すはず無く、ヴァルスは止めに入る。

「終わりだ」

ベルトの部分に軽く手を添え、電子音が鳴り響くと、ヴァルスの  
右足が鉈と同じ様に霞んで見える。

『ライダーキック』

軽くその場でジャンプし、曲げていた膝を鞭の様にしならせ、クリチャーの顔面めがけて足を振り切る。

超振動によって強化された右足の飛び蹴りがクリチャーの顔面を粉々に砕く。

まるでガラスの様に、クリチャーの顔面は破壊され、そしてクリチャーは砂になる。

「ふう」

ヴァルスは着地と同時に、先ほど出来た元クリチャーであった砂を吸収し、レイゲルの方を見た。

## 7、襲い来る影（後書き）

ふう、とりあえずヴァルスのライダーキックを出してみましたか：  
：ぶっちやけ超振動あんまり関係無いんじゃ、的な質問は受け付け  
ません（笑）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2126b/>

---

仮面ライダー 13

2010年10月9日21時08分発行